受け継がれる音楽

岡崎市図書館交流プラザ・りぶらが開設された1年後の平成21年10月、岡崎のジャズ好きのジュニアたちによる「りぶらジャズオーケストラJr.岡崎“Beanzz”」が結成され、講師リーダーのジャズドラマー佐野祐幸氏をはじめ、プロミュージシャンの各パート指導のもとに練習を開始しました。翌年3月にはりぶらホールでファーストコンサートが開かれ、以来、毎年定期演奏会が開催されています。

今年も去る3月25日、りぶらホールにおいて第3回演奏会が開催され、私も初めて“Beanzz”” の演奏を聴きに行きました。この時のプログラムの第1部の締めくくりの曲が『イン・ザ・ムード』で、第2部の締めくくりの曲が『ムーンライトセレナーデ』でした。ともに、今回上映作品の主人公、グレン・ミラーの代表作品です。

ちなみに今回上映作品中では、「ムーンライト・セレナーデ」は、タイトルバックと、苦難の末ついに自分の「サウンド」に開眼し成功を掴み取るダンスパーティーのシーンで演奏され、「イン・ザ・ムード」は、第2次大戦中の、ドイツのV-1ロケットが来襲するロンドンでの野外演奏会のシーンで使われています。

ジャズの生演奏を聴くのはホントに久しぶりだったのですが、各パート講師のプロミュージシャンの参加の貢献もあって、予想以上に素晴らしいジュニアたちの演奏でした。半世紀以上前に感銘を受けた映画『グレン・ミラー物語』の印象や、大阪道頓堀の音楽喫茶「ナンバー番」、京都河原町のジャズ喫茶「ベラミ」などに通った、青春前期の日々を思い出させてくれ、とても感激しました。

丁度この演奏会のころ、「シネマ・ド・りぶら」の今年度の上映計画の内、4月の『バルカン超特急』と12月の『裏窓』が、共にヒッチコック作品でダブっているので、12月の上映作品の再検討中でした。そして、このコンサートの最中にひらめいたのが、『グレンミラー物語』でした。「グレン・ミラーのサウンドは、70年後の日本の、岡崎のりぶらで育ちつつあるジュニアたちの中にも、脈々と生き続けているという繋がりが素晴らしい！」と、早速シネマのメンバーに諮ったところ、「この作品の余韻の残る素晴らしいラストシーンはクリスマスの日だった。この点からも、12月上映作品としてふさわしい」という意見もあり、今回の上映が決まりました。

グレン・ミラー本人と映画『グレン・ミラー物語』については、別コラムでＳ．Ｎさんが触れていますが、グレン・ミラー楽団を後継する「ザ・グレン・ミラーオーケストラ」は、今年も元気に日本公演を継続中です。参考に先月16日、17日に行われた東京公演のチラシと、岡崎ジュニアたち“Beanzz”の来年3月10日のりぶらホールでの第4回定期コンサートのチラシを紹介します。　K.M.

2012.12.20
vol.21

『グレン・ミラー物語』

シネマ・ド・りぶらの
コラム・ド・シネマ

心暖まる、そして切ないラブ・ストーリー

映画全編を彩るグレン・ミラーの甘美なサウンド。これだけでも十分に満足できるが、グレン（ジェームズ・スチュアート）とヘレン（ジューン・アリソン）の愛情物語に加え、仲間たちとの音楽を通じての絆が描かれていて、とてもすばしい作品であった。

グレン・ミラーについて少し調べてみた。1904年～1944年、アイオワ州クラリンダ生まれのドイツ系アメリカ人。ジャズ・ミュージシャン（トロンボーン奏者、作曲家、アレンジャー、バンドリーダー）として活躍。トロンボーン奏者としては目立たなかったが、1937年に自己の楽団を結成後、作編曲家として絶大なる人気を博し、第二次世界大戦の勃発による1942年の兵役まで多くのヒットを放ち、今でも世界で愛されている。1944年、フランスの慰問演奏に飛び立った後、乗っていた専用機がドーバー海峡で行方不明になり戦死と発表された。

そのグレン・ミラーの半生を描いたドラマである。夫婦愛を軸に軽いタッチの作品であるが、劇中に流れる数々の心地よい音楽が、シーンにマッチした構成となっている。しかも、ルイ・アームストロング、ジーン・グルーパ、ベン・ボラック、フランセス・ラングフォードといった往年のミュージシャンも特別出演しており、見所の一つとなっている。

一昨年（2010年）豊田市文化会館に「ニュー・グレンミラー楽団」が来日した。演奏者は若返っていたが、『ムーンライト・セレナーデ』『インザ・ムード』『真珠の首飾り』『茶色の小瓶』など、スタイルや演奏曲は変わりなく、「グレンミラーは居なくなったけれど、グレンミラーの音楽はずっと後世まで受け継がれて行くよ」という、映画の最後の台詞を実感した。　Ｓ．Ｎ

もう一つの「グレン・ミラー物語」

1944年12月15日、ドーバー沖での墜落事故でグレン・ミラーは戦死し、今年で68年がたちました。そして、映画『グレン・ミラー物語』は、没後10年の1954年に公開され大ヒットをしました。

グレン・ミラーの親友であるジョージ・Ｔ・サイモンの著書『グレン・ミラー物語』（晶文社刊）は、没後30年を経て、アメリカで1974年に刊行されました。この著書の序文で、歌手で俳優であるビング・クロスビーは「このアメリカ合衆国にあって、彼の楽団の音楽が嫌いであったり、それに心を動かされない人は、難聴か音痴の人でなければ一人もいないでしょう」と述べています。

また、1960年代の音楽を創り出したビートルズのジョン・レノンは、死の直前のインタビューで「グレン・ミラーやベッシー・スミスより（自分たちが）重要だとは、僕は思わない」と明言しています。

その通り、グレン・ミラーはこの時代のスーパー・スターであり、現在でも、彼が残した楽曲は世界中のファンに愛されています。

（一部同著書から抜粋）　au

『グレン・ミラー物語』 フィルムデータ	原題：The Glen n Miller Story 製作：1953年 アメリカ カラー 上映時間：115分	監督：アンソニー・マン 脚本：ヴァレンタイン・デイヴィス 音楽：ジョセフ・ガーシェンソン、ヘンリー・マンシーニ 出演：ジェームズ・ステュアート、ジューン・アリソン、 ハリー・モーガン

りぶらサポータープロジェクト　「シネマ・ド・りぶら」

『グレン・ミラー物語』 関連図書案内 & DVD

ジェームズ・スチュアート

N 778.2　近代映画社
『20 世紀のグレートスター
　100 ＆外国映画』

N 778.2　毎日新聞社
『20 世紀の大スター 100 選』

N778.2　山田宏一
幻戯書房
『映画の夢、
　夢のスター』

778.04　淀川長治
近代映画社
『名作はあなたを
　一生幸せにする』

『エッセンシャル・グレン・ミラー』

『グレン・ミラー（Colezo!）』

『スウィング！
　プレゼンツ　グレン・ミラー』

『プラチナム・グレン・ミラー』

『ベスト・オブ・グレン・ミラー』

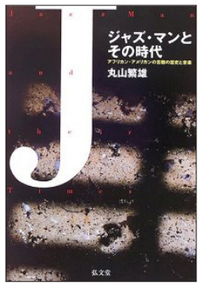
『ベスト・オブ・
　ニュー・グレン・ミラー』

『ムーンライト・セレナーデ』

『ムーンライト・セレナーデ
　プレイズ・グレン・ミラー
　＆カウント・ベイシー』

CD

ジャズの歴史



764.7　岩浪洋三　朔北社
『これがジャズ史だ』

764.7　油井正一　アルテスパブリッシング
『ジャズの歴史物語』

N 764.7　ジョン・F．スウェッド
『ジャズ・ヒストリー』 青土社

764.7　丸山繁雄　弘文堂
『ジャズ・マンとその時代』

764.7　デーヴィッド・W．ストウ
法政大学出版局
『スウィング』

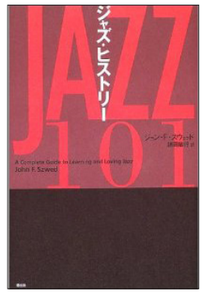
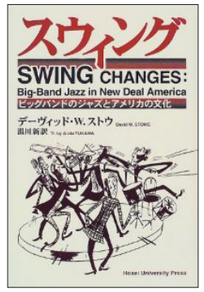
764.7　沢田俊祐　日本文芸社
『面白いほどよくわかるジャズのすべて』

N 764.7　林家正蔵　幻冬舎
『知識ゼロからのジャズ入門 』

N 764.7　ヤマハミュージックメディア
『知ってるようで知らないジャズ名盤
　おもしろ雑学事典 』 小川隆夫

物語＆エッセイ

762　ジョージ・サイモン　晶文社
『グレン・ミラー物語』

F 913.6　矢口史靖　メディアファクトリー
『スウィングガールズ』

N 764.7　和田誠・村上春樹　新潮社
『ポートレイト・イン・ジャズ 2』